

「結局、マスクは外していいの？」 混乱する学校現場

2022/7/3 岡崎勝・小学校非常勤講師、雑誌『お・は』編集人毎日新聞



多くの児童がマスクを着用して行われた体育の授業＝2021年12月、宮間俊樹撮影

新型コロナウイルスの感染者数が減少するなか、政府は、指針の改訂や事務連絡を通じて、学校現場でマスクを外せる場面などを示しました。しかし、読めば読むほど現場には戸惑いが広がっています。

マスクをしない「普通」がうれしい

3年ぶりの水泳の授業では、教員だけが「水泳用マスク」という口鼻用のれんみみたいなものを着用し、「なにい～それ」と高学年女子に笑われ、トホホである。プールサイドから子どもたちに「大声で、はしゃがないの！」とハンドマイクで教員が叫んでも、テンションの高いノーマスクの子どもたちにはなかなか伝わらない。そのむなしさに思わず笑ってしま



プール開きで水しぶきをあげる子どもたち＝2022年6月、藤原弘撮影

まう。マスクのない子どもたちが水しぶきをあげているという「普通」はうれしいものだ。プール開きで水しぶきをあげる子どもたち＝2022年6月、藤原弘撮影

しかし、学校の日常はマスク着用からはなかなか離脱できないでいる。

「子どもって可愛いで

すね、マスクを外して話ができると、すごく気分が良いです」と同僚たちが言う。でも、一方で、「マスクを外すのって、けっこう恥ずかしいですね。それに外しましょうと言って外さない子どもが結構多いんです」と言う。私も指導していて強く感じる。マスクが外せない。能面か何かが顔に張り付いて取れなくなる「嫁脅しの肉付き面」の話があるが、マスクも肉付きになりつつあるようだ。「外しましょう」と言って簡単に外せるものではないことも分かった。

熱中症対策と感染症対策、どちらを優先？

政府見解と文部科学省通知で「子どもたちのマスクの着用が中止になるかもしれない」と思いきや、まったく現場にそんな気配はない。どこが変わったの？と保護者に尋ねられても、その説明も中途半端で「なんだかよくわからないわね」と言われ、「結局、いままでとかわりないわけですね！」と念を押されてしまう。

6月の半ばには「新型コロナウイルス感染症対策としてのマスクの着用について」の「追加プリント」が保護者に渡された学校もある。つまり、「結局、マスク外していいのか？」という説明不足への補足説明である。

「体育などで、熱中症リスクが高くなることが想定されるため、熱中症対策を優先し、児童生徒に対してマスクを外すように指導します」という「追加」のアナウンスである。「外すように指導します」が付け加わった。

「で？ 何？」、結局、外させることにする。しかし、「熱中症対策」だから？マスクを外すのであり、「新型コロナウイルス感染症」に関わってマスクを外すのではないのだ……。よく分からない、というかりスクの優先順位によるのだろうか。「熱中症の危険がなければ、マスクは今まで通り着けるのですか？」と悩んでいる。教員は外していいのか？ 微妙なのだ。

難解な文科省の通知

文部科学省が6月10日に出したマスク着用についての通知の要点は、「3密回避」と同時に①人と人との距離確保②マスク着用③手洗い等④換気という四つである。そして、これらを「徹底していく必要があります」と述べられている。

そして「熱中症予防」にも気を付けて「適切に御対応ください」と言う。これをもとに地方の教育委員会、各学校は「新型コロナウイルス感染症対策としてのマスク着用について」というようなプリントを保護者に配布したのである。しかし、実際のところ文面は今までとほとんど変わりはない。

マスク着用について、ある教育委員会が教職員に配布したマニュアルを見てみよう。

「登下校時など屋外では、十分な身体的距離2メートルが確保できる場合には、マスクを外してもよいことを指導する。また、身体的距離が確保できない場合であっても、会話を控えた上であれば、マスクを外してもよいことを指導する」とある。

基本的には「身体的距離2メートル」か「会話無し」であればマスクはとってよいということだ。「登下校時はマスクを外していいことになった」というようなアナウンスをどこかで聞いたことがあるが、実際は「身体的距離2メートル」「おしゃべりしない」が確保できなければ、マスク着用は必要だということには変わらない。

さらに、屋内では「原則マスク着用」であるからほぼ今まで通り。授業中の対面は、「沈黙して15分以内ならよろしい」という根拠のはっきりしないマニュアルも以前からある。

試される学校のリスク回避能力

今回の文部科学省通知は夏の熱中症予防に向けての意味もあったと思うが、熱中症予防はマスクの着脱指導というよりも、学校の側のリスク回避能力に負うところが多い。要点をいくつか挙げてみよう。

熱中症の危険があるような運動なら、休むか中止すべきだ。炎天下の部活などは自殺行為だと。まあ、体育会系部活大好き先生の多くは「根性と信念」が「理性」をしのいでいる場合があるので、なかなか難しいのだろうが。

同じように、気温が高いにもかかわらず「これくらい大丈夫です」などと言って、体育授業をしている場合。または、長時間にわたり炎天下に立たせて訓話を聞かせる場合。そして、もっとも問題なのが、子どもが幼いか、あるいは子ども自身が周囲におもんばかって、「つらい」ということを、「弱音を吐くこと」と勘違いして、自制する場合などが、リスク回避に鈍感になりやすいと考えられる。

「少くくはは頑張ってほしい」という教員や親の気持ちも分からないわけではない。しかし、今の子どもたちは、私たち大人の子どもの時代（昭和、平成前期まで）とは「育ちが違ふ」のだ。しかも、温暖化の影響だろうが夏の気温の高さは尋常ではない。私自身、担任を持っているときに室温が34度になったことがある。当時はエアコンもなく、窓を全開しても風が入らない教室の熱風を扇風機4台でかき回しているだけなので、外の木陰にクラス全員で避難したことがある。午後の学校でエアコンのない運動場や体育館は過酷なのである。

「自分でマスクを外してよいか判断の難しい児童生徒には、気温や湿度、屋内・屋外にかかわらず息苦しいと感じたときにはマスクを外すように指導するように」と言われても、「感染すれば命に関わるし、他人に感染させる危険性があるから、常に着用すること」を恐怖と共に2年間つけられた子どもたちには、なかなか難しいのだ。

マスクの「効果」と「リスク」

「距離を離しておしゃべりしないってさ、シカト・ムシみたいで、なんかいじめにあつてゐる状態みたいで笑えるね」と以前、子どもに言われ、思わず「笑えないぞ」と苦笑いするしかなかった。子どもにとっては、マスクを外して離れているくらいなら、マスクを着けてベタベタくっついて遊んだ方がいいのである。あ、ベタベタもダメだっけ……。実際に、2メートル離れて、黙っているような遊びは子どもたちにはない。

以前から、子どもにマスクは無理があると言われていた。私自身もマスクの効果とリスクを考えると、子どもには必要ないと思っている。子どもの表情がつかめないまま学校生活が続いているし、子どもたちも先生の顔を見ることができていない。たまたま先日、苦しくなつてマスクをちょっと外したら子どもが「わあ、先生の顔初めて見た」と笑っている。

身体的に接触しないデジタル機器で子どもたちの気持ちをつかもうというアプリケーションが学校に出回っているが、リアルに顔の表情を読むことの重要性を私は強調したい。リアルな人間の距離感とは違ふのだ。たとえ「昭和ですねえ」と言われても、令和をディストピアにしないためにも言わなくてはならない。

実質的には今までと何も変わらない、今回の「マスクを外していいですよ」という文部科学省の通知は、「マスクにこだわるせいで熱中症になつてしまった」ということになつた

ときに、責任を逃れるための免罪符づくりのためのものとか、私には思えないのである。
現場は本当に困惑しているのだ。